

トピックス2

朝鮮人民衆と共に歩んだ日本人 —布施辰治・上甲米太郎の一生から—

高麗博物館館長
樋口 雄一

高麗博物館では2007年に「布施辰治展」（後援韓国大使館・韓国文化院・自由法曹団）、2008年に「上甲米太郎展」を開催しました。いずれも、植民地下で朝鮮人の民衆と共に歩んだ日本人です。

日本が朝鮮を植民地にしていた時期に、多くの日本人は総督府の官僚や教員として、あるいは地主として暮らしていました。朝鮮人民衆から見れば日本人は支配者そのものでした。しかし、朝鮮人の心を理解し、朝鮮人と共に歩もうとした日本人もいました。朝鮮人が独立を考え権利を守ろうとしたときにそれを支持し、共に行動しようとしたのです。実際に朝鮮人と共に歩み始めますが、日本の警察力によって弾圧され、朝鮮人と共に獄窓につながれてしまいます。こうした日本人は日本社会から追放され、弾圧下に苦しい戦時下を過ごさなければなりません。それでも信念を曲げずに戦後にも朝鮮人を友として歩んでいます。朝鮮の美を理解し、それを守ろうとした人もいますが、さらに一歩進んで植民地支配を批判し、朝鮮人と共に歩もうとした日本人の存在はこれからの日本人の生き方・あり方を問い、アジアの人々との友好を考える際には貴重な道をさし示しているといえましょう。こうした行動をした代表的な日本人として、弁護士・布施辰治、教員・上甲米太郎を紹介したいと思います。

布施辰治の生涯と朝鮮との係わり

布施は自由法曹団（1921年創立）に参加し生涯を通じて貧しい人々の弁護を行いました。彼の弁護活動の特徴は日本人のみならず依頼されれば朝鮮人、中国人（台湾）の弁護を積極的に行なったことです。なかでも朝鮮人農民、労働者の弁護には熱心で、この中で朝鮮人の友人も出来ていきます。布施が朝鮮

人民衆にとって「朋友」であり、「同志」であったと評価され、韓国政府から日本人としては唯一人「建国勲章愛族賞を受賞」したことがそれを証明しています。彼のいくつかの朝鮮人の弁護活動を紹介して日本人との友好を考えたいと思います。



写真1 布施辰治

布施は1880年、宮城県蛇田村（現石巻市）の農家に生まれ、キリスト教の影響などを受けながら成長します。明治法律学校（現明治大学）を卒業し1903年から弁護士活動を始めます。この頃、トルストイに傾倒します。1919年2月には在日朝鮮人留学生達が独立宣言文を起草したとして60余人が検挙されますが、この弁護に奔走します。この宣言文が朝鮮に持ち込まれ、3.1独立運動が朝鮮で展開されます。社会的な弱者、労働者・農民の弁護を行うことを宣言し、以後、この趣旨に沿った弁護活動を実践します。彼は信条として「生きべくんば民衆とともに 死すべくんば民衆のために」を掲げて生きていくことを決心します。

関東大震災では在日朝鮮人の殺害に抗議し、真相を調査し、追悼会を行おうとしますが弾圧されます。また、朝鮮人社会活動家（アナキスト）朴烈と彼の妻、金子文子が大逆罪で逮捕されると（大逆事件）、親身になって弁護します。金子文子が獄中で自死したときには遺体を引き取り、遺族に引き渡しています。彼の活動は日本国内にとどまらず、朝鮮でも講演、弁護活動を行います。これは極めて困難な活動になりました。朝鮮総督府の厳しい監視と弾圧のなかで行われたからです。1926年の第2回訪朝は農民運動の支援で、朝鮮全羅南道羅州郡宮三面の朝鮮人側の土地所有をめぐる紛争解決のためでした。朝鮮人の土地が東洋拓殖株式会社の土地となり、農民はこれを取り返すべく、布施に依頼したのです。布施は調査用紙を配布しようしますが警察の妨害で十分には出来ませんでした。布施は抗議し、朝鮮人農民から実状を聞きます。こうした布施の活動が



写真2 羅州宮三面抗日農民運動記念碑

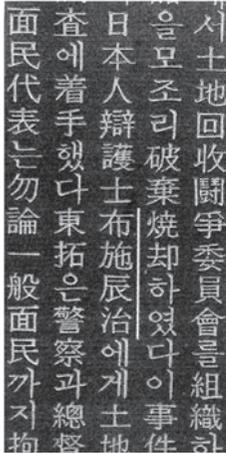


写真3 記念碑裏面に刻まれた碑文

朝鮮全体の日本による土地収奪問題に発展することを恐れた総督府は東洋拓殖株式会社に妥協させます。宮三面の農民は厳しく弾圧されています。解放後、このことを記憶していた農民達は現地に抗日農民運動記念碑を建てますが(写真2)、碑文には布施の功績をたたえる一文が刻まれています。写真3に見られるように日本の植民地支配下に苦しんだ農民達が解放後(戦後)、

数十年を経て訴訟を助けた日本人の名を記しています。こうした碑文は朝鮮の地では此処のみでしょう。その後も2回に渡り、朝鮮独立や社会改革を試みた朝鮮人達の弁護を他の自由法曹団のメンバーと共にを行います。彼は社会的な弱者には最大の努力をして弁護を全力で行いました。日本国内でも一貫して朝鮮人の弁護に参加していますが、自身も当局から弁護士資格を剥奪されるなど戦時下には十分な活動が出来ませんでした。同時に1944年に辰治の三男、杜生が治安維持法違反で特別高等警察に逮捕され、獄死します。しかし、敗戦直後から活動を開始して1946年には「朝鮮建国憲法草案」を起草したり、戦後、多くの朝鮮人が参加したメーデー事件などの弁護と共に朝鮮人が生活のために行っていた濁酒製造などで逮捕された人々の弁護まで行っていました。朝鮮人の権利を守るため全国を飛び回って弁護活動をしていた布施が1953年に没したときには全国から多くの朝鮮人が葬儀に参列しました。植民地民衆に対して平等な目で接し共に歩んだ生涯でした。そのために布施は日本よりも韓国で民衆に知られている存在になっているといえましょう。

朝鮮の子供たちと生きた教師、上甲米太郎

上甲は愛媛県宇和郡千丈大村(現八幡浜市)に地主の長男として1902年4月16日に生まれました。父が貧しい地域の産業を考え事業を試みますが失敗し、両親は朝鮮に渡ります。上甲は郷里で祖母に育てられながら大洲中学を卒業しますが、キリスト教の洗礼を受けたことが彼の精神形成に大きな影響を与えます。彼は進学を断念し朝鮮に渡り、総督府が設置した京城の教員養成所に入り、2年後の1922年には朝鮮南部の慶尚南道の朝鮮人学校咸安公立普通学校に始まり、冶炉、昆明公立小学校に勤務します。冶炉公立普通学校以降は校長になります。当初、彼は他の日本人教師と同じように朝鮮人を「日本人として」立派に育てることに情熱を注いでおり、植民者として朝鮮支配に疑問を持つてはいなかったようです。しかし、次第に日本の植民地支配に疑問を持つようになりました。それには上甲がキリスト教的な平等観、人道主義から朝鮮の文化や子供たちに接し、朝鮮を愛するようになったことがあります。青年の彼は朝鮮人の教え子に恋もし、悩んでもいます。一方愛媛の郷里に帰るときも朝鮮服を着て帰り、警察に10回も質問されます(写真4朝鮮服を着て愛媛に帰った上甲)。朝鮮人と思われるほど朝鮮語が堪能にもなりました。

彼は教え子達の教育に熱心であっただけではなく、将来の就職についても心を砕くようになります。朝鮮人に対する差別が激しく学校を出ても仕事が無かったのです。上級学校に行ける子も貧しかったため、学費がないと自分が借金をして入学させたりしています。それでも個人の力ではなんとかならないことが多かったのです。

当時学校に来られた子供は少なく、就学率は10パーセント前後でした。農民生活は貧しく多くの農民が春窮期には草根木皮で飢えをしのいでいました。上甲も山奥の学校でそれを見ていたのです。誠実だっただけに悩み解決の道を考えるようになります。上甲は生徒達に「大化の改新」の授業を行ったときに公地公民＝土地は国有であると話しますが、この時に地主の支配に喘ぐ農民の声を反映した生徒達から「今、ここで出来ないことでしょうか」(1927年の「日記」から)と問いかげられます。地主が圧倒的に力を持っていた朝鮮の現状に生徒は正しく反応していたのです。生徒の問いに当惑しますが、社会

問題に接近する契機にもなります。生徒から学んでいるのです。彼は3.1独立運動の様子を具体的に描いたシナリオを「日記」に書いていますが、これは3.1運動の存在を抹殺しようとしていた総督府の意に反し授業を通じて生徒に知らせようとしたのだと思われま。当初は賀川豊彦、河上肇の著作などを読んでいましたが、次第に社会主義的雑誌「空想から科学へ」「戦旗」などを読み始めます。プロレタリア教育を掲げる「新興教育」誌が刊行されると直ぐ読者になり、投稿をしています。朝鮮人農民収奪に対する批判や読者会を組織することを目標に朝鮮人の教え子や同僚教員にも働きかけます。このことは当局に知られ、合法雑誌の読者会を開こうとしただけでもかかわらず、1930年12月には関係者全員が治安維持法違反で逮捕されます。彼は教え子と共に有名な京城（ソウル）の西大門刑務所に収監されました。これを理由に東京で「新興教育」を刊行していた山下徳治なども逮捕され、神奈川県、長野県などでも多くの教員達が逮捕されます。このことによつて上甲は職を失い、朝鮮で土木労働、保険の外交員などをして暮らさざるを得なくなります。その後、特高警察に監視される生活でしたが、朝鮮語が堪能なことを理由に北海道の炭鉱に強制連行された朝鮮人達の通訳として動員されます。その朝鮮人労働者と共に福岡の三池炭鉱に移ります。ここでも朝鮮人労働者を助けようとはしますが、限界があり労働課係として働かざるを得ませんでした。そこで敗戦を迎え、直ぐ労働組合運動に参加、三池炭鉱を解雇

されます。その後は朝鮮人集住地区に住みながら子供を守る会の活動や紙芝居などで生活していました。東京に移ったのち1986年に没するまで朝鮮との友好運動などに参加します。大半の日本人が朝鮮の植民地支配を肯定し、戦後も続いた在日朝



写真5 昆明公立普通学校卒業式（前列中央が上甲）

鮮人差別に対して身を顧みることなく朝鮮人との人間としての友好を貫いていた人物です。日本人としては希有の存在といえましよう。

布施辰治や上甲米太郎以外にも朝鮮人と共に歩み闘った日本人はいます。敗戦前、京城帝国大学教授の三宅鹿之助は朝鮮人共産主義者を床下に長期間にわたり匿って治安維持法違反に問われ職を奪われています。布施の後輩弁護士古屋貞夫は長期間朝鮮に滞在して朝鮮人社会運動家の弁護を行い、敗戦後に代議士になってからも朝鮮との友好運動に参加しています。また、労働運動を共にした日本人もいます。共通していえるのは彼等が朝鮮民衆の声を聞き、行動していることであるといえましよう。これらの人々は日本人からは忘れられています。

今も植民地支配を肯定したり、排外的な動きや在日朝鮮人に対する差別が続くなかで、こうした日本人の歩みを知ることは新たな友好の輪を広げることになると思います。

なお、布施辰治、上甲米太郎については高麗博物館が作成した展示図録があり、『布施辰治と朝鮮』を発行しています。原資料などの所蔵先などについては高麗博物館にお問い合わせ、おたずね下さい。

高麗博物館
東京都新宿区大久保1-12-1第2韓国広場ビル
7階 TEL 03-5272-3510
開館時間 12:00～17:00（休館日 月・火曜日）



写真4 朝鮮服の上甲